

高齢者の手術について

高齢化社会を反映して手術を受ける患者さんも高齢の方が増えています。私が医師になった40年前には「65歳以上の高齢者の手術適応は慎重に判断する」とされていました。昨年4、533人の方が当院で手術を受け、その中で、65歳以上の方が2,372人でした。また、80歳以上の方がなんと761人もみえました。

高齢であっても体力や健康状態が向上し、「若々しい高齢者」が増えていることもあり、65歳以上の高齢者の身体機能や知的機能は、10〜20年前の同年代の人たちに比べて、10歳ほど若返っているといわれています。

Q 現在では高齢の方でも比較的安全に手術が可能になりました。なぜでしょうか？

手術治療では、近年の手術機器の発達に伴い、「高齢者」に優

しい治療が開発されています。消化管の早期がん(胃がん、大腸がん、食道がん)に対する内視鏡治療や腹腔鏡下手術、肺がんに対する胸腔鏡手術などがその例です。

また、乳がんや皮膚がんなどのような患者さんに与える負担が比較的少ない場合には年齢に関わらず積極的な治療が実施されています。

さらに手術に必要である麻酔は、モニター機器、麻酔器、麻酔薬等の進歩により、非常に安全なものとなりました。

Q 高齢者の手術の場合、どのように進めていくのでしょうか？

年齢そのものが危険因子と言われますが、年齢以上に手術のリスクを著しく高めるのが、健康状態や特定の病気の存在です。

医師は、患者さんが想定される手術に耐え、回復し、健康を取り戻すことが可能かを判断します。そのため、「身体状況」「検査所見」「理解能力」「精神状態」などを参考にします。このような細目とともに、全体的な印象も大切で、次のような項目を重視し、患者さんの全身状態を把握した上で判断します。

- 自分の身の周りのことは自分でできるか？
- 同年齢の健康な人と比べて同じように歩き、同じように階段を上れるか？
- 説明についての理解力が十分か？

高齢の方が手術を受ける場合には、まず内科的な面から各臓器の余力、回復力を評価し、外科的には手術時間の短縮・最小の出血量を目標に、さらに麻酔科的にはモニターの充実や適切な麻酔管理で手術中の合併症の早期発見や予防に努めるというように、各科の協力体制のもとに安全な手術を目指しています。

最後に

**日常生活が
できているかどうか**

日常生活というのは毎日の生活を自立してできているかどうかです。料理の準備や片付け・掃除・洗濯・排泄などを自分でできている、息苦しさや疲れが一般的であれば体力があるといえるでしょう。

**スポーツや運動
をしているか**

ゲートボールでもウォーキングでも良いので定期的にスポーツをしているかどうかは体力の有無に大きく関係してきます。散歩でも良いので適度な運動をしていれば体力があるといえるでしょう。そのような体力があれば、手術のリスクを減らすことができます。

**持病をきちんと
管理しているか**

例えば、糖尿病、高血圧、心臓疾患、呼吸器疾患などの持病をもっている方は、普段からか

かりつけ医に診てもらいましょう。喫煙もダメです。

今後ひょっとして手術を受けなければならぬかもしれませんが、そのときのために体力をつけておくのも良いでしょう。



今月の先生 岐阜市民病院 麻酔科
太田 宗一郎

- 役職
病院長
- 主な資格、認定
麻酔科標榜医
日本麻酔学会認定指導医
日本専門医機構認定麻酔科専門医
- 卒業年、主な職歴
昭和55年岐阜大学医学部卒
岐阜大学医学部麻酔学教室講師